岩手の被災4市町関係者

瑞浪（岐阜）の共同店舗視察

商業核施設整備の参考に

大手凌ぐ30年の運営実績学ぶ

東日本大震災からの復興に向け、中心市街地の商業核施設（共同店舗）の整備を計画している岩手県沿岸部の4市町の関係者が7月7、8の2日間、岐阜県瑞浪市の共同店舗「瑞浪ショッピングセンターメイト」を視察した。共同店舗としてオープンして以来、約30年にわたり、周辺に複数存在するチェーン店を凌駕する勢いで営業を続けてきている同ショッピングセンターを先進事例として参考にするためで、中小機構が岩手県に紹介して実現した。

この視察は、岩手県が主催する「平成27年度商業施設運営管理セミナー」の一環。同セミナーは、同県の沿岸市町が計画する商業施設を将来にわたって持続可能な共同店舗とすることを目的に全5回の予定で実施しており、中小機構は企画段階から協力している。

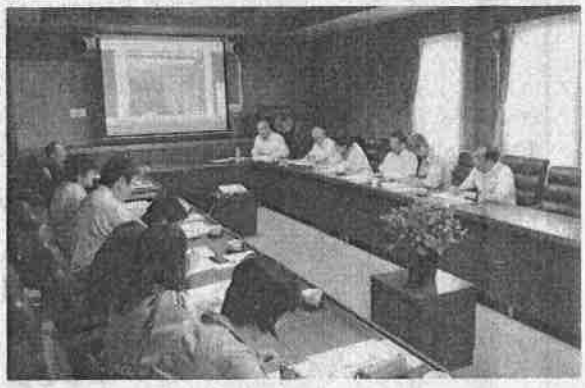
瑞浪ショッピングセンターメイトの視察はその第3回として実施し、釜石市、陸前高田市、山田町、大槌町の商業者や自治体職員ら計12人が参加した。

瑞浪ショッピングセンターメイトは、岐阜県と中小企業事業団（現中小機構）の協調融資である「高度化資金」を活用して、商業者19人で1986（昭和61）年にオープンした。現在はスーパーマーケット「ワンダー」など10店舗が共同店舗で営業している。

セミナーでは初日の7日に同共同店舗内を視察＝写真㊤。その後、瑞浪商工会議所の会議室に移動して、同共同店舗を運営する「協同組合メイト」の河瀬進理事長による「商業施設運営管理に係わる事例紹介～協同組合メイトにおける取組～」と題する講義を聞いた。

続いて、中小機構の長坂泰之震災復興支援部復興支援課担当課長がコーディネーターとなって、参加4市町による状況説明や河瀬理事長らとの意見交換、質疑応答が行われた＝写真㊦。

2日目の8日は、同共同店舗恒例の「水曜大均一祭」を視察。瑞浪商工会議所で質疑応答・意見交換を行った。

「玉子1パック80円」など80円商品がずらりと並ぶ水曜大均一祭では、250円の弁当など目玉商品も販売され、開店と同時に来店客が殺到。被災地から訪れた視察団参加者は一様に客の多さに驚いていた。また、両日行われた意見交換会では、競合店に囲まれた立地の中で、これだけの集客力を発揮し、継続できる秘訣などについて、数多くの質問が出された。

セミナー終了時に、民間まちづくり会社「共同店舗棟建設運営山田」の社長で、山田町商工会長の阿部幸榮氏が参加者を代表して挨拶。「2日間、大変お世話になった。百聞は一見に如かず。時間をかけて瑞浪まで来た価値があった。今日学んだことを共同店舗の運営に活かしていきたい」と現地関係者への謝辞と視察の感想を述べた。